

# 海外ドキュメンタリー番組制作における 産学連携の研究

—「「三国志」の子孫をさがせ」の制作を中心に

渡邊 義浩・蔣 樂 群

はじめに

大学における研究成果を社会に還元していくうえで、産学連携は欠くことのできない方法である<sup>(1)</sup>。しかし、研究の成果を直接的に企業の営利に結びつけ易い理科系とは異なり、文科系の学問成果、なかでも人文学の成果は、啓蒙書を刊行する方法以外には、社会に還元することが難しい。

大東文化大学において後漢・三国時代の歴史を研究している渡邊義浩は、NHKの海外番組の制作にディレクターなどの立場から長年関わってきた蔣樂群と連携することにより、海外ドキュメンタリー番組「「三国志」の子孫をさがせ」の制作に協力した。本稿は、その過程を振り返りながら、人文学における産学連携の可能性を追求するものである。

## 1、「三国志」の子孫村

渡邊義浩が三国時代の英雄の子孫であると称する者達が集中的に居住している宗族村の存在を知ったのは、1998年4月25日に放映されたTXN九州の番組「三国志ロマン—実在した諸葛孔明の村」の取材を受け、番組に出演したことがきっかけである。この番組は、浙江省蘭溪市諸葛鎮諸葛村の人々が、文化大革命による焼却から民國三十六（1947）年出版（第16版）の『諸葛氏宗譜』<sup>(2)</sup>を守り抜き、その信憑性が1992年の第六回諸葛亮研究会大会で認められることにより、観光開発に成功していく過程を描いたものであった。その制作の過程において、取材班が入手した『諸葛氏宗譜』の複写版を読み、

蘭溪縣志<sup>(3)</sup>などを調査したところ、諸葛村が次のような経緯で今日に至ることが分かった。

諸葛亮（諸葛孔明）には息子の諸葛瞻がいるが、蜀漢の滅亡時、彼はその子尚とともに、鄧艾軍を防ぎ戦死した。『諸葛氏宗譜』によると、一族は諸葛尚の弟諸葛京の後裔にあたるという。京が西晋に仕え江州刺史となったことは、『三国志』卷三十五 諸葛亮伝注『啓事』に記載がある。京の子孫はその後も歴代王朝に仕えたが、五代の後周の広順二（952）年、第十五世の諸葛澗は、戦乱を避けて浙江に入った。さらに時代は下り、第二十八世の諸葛大獅が高隆崗に移住したのが、現在の諸葛村の始まりである。元朝中期の頃（1340年頃）のことであるという。風水に通じていた彼は、九宮八卦陣に基づき、鍾池を中心としてその周囲に建物を配置するように設計した。その構造は現在に至るまで基本的に変わっていないという<sup>(4)</sup>。八卦に基づいて設計されたこの村は、泥棒などが侵入しても迷ってしまうといわれる。また、村そのものが、外敵に発見されにくい立地で、元末に村ができて以来ほとんど戦乱に巻き込まれなかった。基本的な構造が変わらずに済んだのはそのためであるという。

現在、中国全土には諸葛亮の子孫と称する人が一万人あまりいるが、そのうち諸葛村には約四千五百人が住んでいる。村のある蘭溪市には、巨大な諸葛亮の石像が建っており、訪れる者を迎える。村では、旧暦の4月14日と8月28日に、偉大なる先祖諸葛亮の祭祀を行っている<sup>(5)</sup>。村の人々は、諸葛亮が息子の瞻に諭した「誠子書」を教訓として日々を生きている<sup>(6)</sup>。また、諸葛亮は子孫に「良い丞相になれなければ、良い医者になれ」と語ったと伝えられ<sup>(7)</sup>、村では古くから薬剤業が非常に盛んである。諸葛亮の教えは、今も村人の心の中に生きているのである。

三国時代に生きた諸葛亮の実際の子孫が、諸葛村の人々であるか、という問題を『諸葛氏宗譜』以外の史料から実証することは難しい。『諸葛氏宗譜』においてすら、五代までの史料はあまりに零細である。しかし、五代の諸葛澗以降の子孫から、今日の諸葛村の人々までは連綿と続く家系であるし、何

よりも、彼らは諸葛亮の子孫と信じ、その「誠子書」を自らの生の拠り所として生きていた。その歴史に誤りはない。すなわち、三国時代からの子孫であるか否かは不明であるが、「三国志」の子孫であることは間違いない。番組のタイトルが「三国志」の子孫をさがせ」と付けられている所以である。彼らの「三国志」への思い、祖先への思いを掬い取ることができれば、現代の中国を生きる人々の思いを日本人に伝えることができるのではないか。

大略、以上のようなことを蔣樂群に話した。かつて蔣樂群がディレクターとして制作したNHKの番組「よみがえる孔子—21世紀を生き抜く中国の知恵」(衛星第1放送、2000年12月3日放映)において、孔子の家譜を編纂する試みに共に着目したことがあったためである。蔣樂群はこれをビジネスと係わらせて番組にしようとプランを立てた。

三国志は日本人にとって、浸透度と好感度のあるテーマである。その文武の英雄の物語は多くの人を魅了しており、三国志に係わる新たな発見があれば、興味を引ける。また、現在の日本における価値観の激的な変容と将来像の不確実性は、戦乱の世である三国志への関心を増している。事実、諸葛亮は自分の人生を、曹操のような大手企業に託すのではなく、劉備のような無名の新人、ベンチャーにかけた、といった浅薄な歴史像の投影が、ビジネス書などでは好評を博している。しかし、三国志の英雄の子孫が発見されたというスクープだけでは、一本の番組を組み立てることは、内容のボリュームから考えても難しい。しかも、諸葛亮の英雄像を取り上げる「その時歴史が動いた」のような番組であれば、すでに多く制作されており、新しく作ることは許されまい。

そこで新しい視点を歴史ビジネスに求めることにした。中国では、この数年、観光開発を官民一体で推進している。いわゆる歴史ビジネスが盛んに行われているのである。孔子・老子・魯迅、そして三国志など、歴史的に著名な人物は観光開発の最先端となっている。それを単なる金儲けと捉えることは、表層的に過ぎる。表向きは金儲けである歴史ビジネスの裏に、現在の中国の人々が、先祖に対して持っている思いや、経済がすべての価値観を席卷

するかにみえる中国に残る歴史への思いを探ることができれば、新しい視点を提示できる。この提案は高い評価を受け、73分の衛星放送「地球に好奇心」と39分の総合波「地球に乾杯」の番組として制作されることになった。具体的な番組制作は、NHK エンタープライズ21の委託制作として東京ビデオセンター（TVC）の佐野岳士氏が行うことになった。

こうして準備が整い始めたころ、事態に動きがあった。諸葛一族の家譜の発見は話題となり、中国中央電視台（CCTV）で特別に報道されていた。その諸葛村から200km四方のエリアで、孫権の子孫、劉備の子孫、さらに曹操の子孫が揃って生活をしているとの情報が、浙江省の地方新聞の記事となったのである。地元のマスコミはこれを経済振興策の一環として、「三国カード」として使うべきだと主張していた。こうした動きを受けて、浙江省政府が観光開発の一環として、点在する三国志の英雄の子孫と遺跡の真偽を調査することになったのである。これを追いながら、ドキュメンタリー番組を作る。むろん、経済面の観光開発だけではなく、子孫が持つ先祖に対する思い、中国の人々の歴史に対する思いが、複眼的に伝わる番組を目指すことになった。

## 2、先行調査と事実の追究

以上のような主旨に基づき、渡邊義浩が大まかな番組の枠組みを提案し、蔣樂群はTVCの佐野氏と共に浙江省の先行調査に赴いた。現地では、第一に観光のための「新三国街道」を作る計画を持っている政府の観光局（浙江省旅遊局）の紀根立局長、顧問の沈景華氏らと会い、政府の調査はどのような形で行われるのかを尋ねた。浙江省旅遊局の予定では、文化史を専門とする教授、観光開発の専門家、政府観光局の幹部、郷土史家、地元の三国志研究会などを集め、三国英雄の子孫を名乗る村と遺跡をめぐり、調査を行うとのことであった。

そこで、政府より先に、三国英雄の子孫を名乗る村と遺跡を調査することにした。孫権の故郷である富陽市では、三国演義研究会が盛んに活動していた。その中心人物である王運祥・蔣増福氏の紹介により、孫権の子孫が多く

住む富陽市の龍門鎮・孫権からの家譜を伝える化竹村・曹操の子孫を名乗りたいが確証のない上村・劉備の子孫であることを証明できる家譜を持つと主張する曙星村など、諸葛亮の子孫が暮らす蘭溪市の諸葛村以外の調査の対象となる村や遺跡の先行調査を行うことができた。

その結果は、東京で待つ渡邊義浩のもとへ報告され、事実の追究がなされた。諸葛村に関する調査は、前述のとおり既に終了していた。龍門鎮・化竹村といった孫権の子孫を称する村は、富陽市が三国時代における孫権の故郷である呉郡富春県にあたるため、信憑性が高かった。なかでも、TVでは使わなかったが、化竹村には明の天啓六（1626）年版、清の光緒十一（1885）年版、民國二十三（1934）年版など、いくつかの時代に編纂された家譜が複数残っており、学問的に貴重なものであった。家譜は、新しい版の作成とともに旧来のそれを破棄してしまうので、同じ一族の家譜が、このように編年的に残存する事例は珍しいためである。天啓版の家譜は、損傷した部分も多いが、その序において、一族の祖を孫鍾（孫権の祖父）としている。また、同村に残る他の家譜とは異なり、孫権をはじめとする偉大な先祖の肖像画があるのも大きな特徴である。それにもかかわらず、家系図においては、未だこの地に引っ越してきた先祖の代を第一世としているなど興味深いことが多かった<sup>(8)</sup>。

信憑性が新たに発見された村もあった。曹操の子孫を名乗りたいが確証のなかった上村である。上村にかつてあった家譜は文化大革命で焼かれ、村に残る証拠は曹氏宗祠の内部にある対聯だけであった。現在では一見倉庫のようにも見える宗祠の内部の石柱に、いくつもの対聯が記されているのである。蔣樂群は、対聯のなかから重要そうな文章を写し、渡邊義浩にFAXで送付した。そのなかに、「上遡陳思、才超鄴郡」（先祖は陳思王曹植にまで遡る、陳思王の才能は鄴において卓越したものであった）という一節があった。これは上村の曹氏が、自らの祖先として曹植を尊敬していたことを窺い得る貴重な資料である。また、彼らが安徽省の雄村から移住したことを示す対聯もあった。そこで、家譜を多く収蔵する東洋文庫で調査したところ、曹操の子

孫を名乗る唐の武将の子孫が雄村から上村へと移住したことを示す家譜が収蔵されていた。蔣樂群と佐野氏の帰国後、東洋文庫に撮影許可を願い出ようとしたが、許可がおりるまで待つ時間はなかった。TVでは、雄村に似たような家譜の部分的コピーを秘蔵している村民がおり、その撮影を行うことによって、より効果的に人々の祖先への思いを伝えることができた。

一方で、明らかに信憑性がないものも多かった。劉備の子孫であることを証明できる家譜を持つと主張する曙星村がそれである。村民の多くは姓を金といい、彼らは死ぬと劉姓として葬られる風習がある。村に伝わる民國十四(1925)年版『富春劉氏宗譜』には、序において、一族の先祖として劉邦や劉秀などを挙げたのち、以下のように述べられる。「孝献皇帝(献帝)に至り、曹丕は位を篡奪して帝を廃し、由陽<sup>(9)</sup>公とした。幸いにして昭烈帝は諸葛亮・関羽・張飛を用いて、魏呉と戦い、成都を首都とした。その後、司馬炎が即位すると、我らの先祖である劉川は、難を避けるべく隠棲し、劉の字から「卯」と「刀」を取り去って、金姓を名乗った」と。一読して明らかのように、この序文は、劉邦や劉秀はともかく、昭烈帝(劉備)のことを先祖であるとは書いていない。家譜に記された系図にも劉備の名は無く、一族は劉志(桓帝)の末裔ということになっている。また、系図では劉邦から劉徹(武帝)・劉秀を経て劉志までを直系の一族として記しているが、劉秀は劉徹の子孫ではなく、劉徹の弟である長沙王発の子孫である。同家譜の系図には、このような史実との矛盾が随所に見られ、信憑性は高くない。蔣樂群の送ってきたFAXを見ただけで、この家譜から劉備の子孫を名乗ることができないことは明らかに分かった。

出張組も揉めていた。家譜に信憑性がないことを一番心配したのは、NHKの番組を多く手がけてきた佐野氏であった。事実でないことを報道してよいのか。佐野氏は、その一点に拘り続けた。蔣樂群は説得した。本来、この番組は家譜の発見をスクープする番組ではない。金一族が劉備の子孫であるか否かの判定は、観光局の調査団の仕事である。番組制作者にとっては、金一族が劉備の子孫であると名乗り、それを信じこんでいることが事実として

重要である。彼らが現在、自らを劉備の子孫と信ずる理由あるいは動機に、歴史ビジネスブームを係わらせて伝えることができれば面白い。そもそも、出来の善し悪しはあるにせよ、中国の家譜のなかで記述が正しいことを保証できるものは、歴代の国家の保護を受けて編纂されてきた孔子の家譜しかないのである。さらに言えば、たとえ金一族の系譜のなかに、正しい継承関係に基づき劉備の名前が記載されていたとしても、この家譜は民国に編纂されたものであり、これを歴史史料として三国英雄の子孫を断定することは無理なのである。番組の主眼は、歴史学の実証にはないと。

番組にとって必要なことは、いままで劉という苗字を隠して金という名前で暮らしてきた一族が、ようやく堂々と劉という苗字で背伸びをしようとしている変化は、なにを背景としているのか。ここに中国の人々の歴史に対する基本的な考えが現われるのではないか、ということにある。1960年代の文化大革命では、古い文化が破壊され、宗族の歴史、家譜といった一族のアイデンティティを反映するものは、否定の対象であった。多くの家譜が焼かれたのは、このためである。それに対して現在、観光ビジネスという時代の流れのなかで、断絶の歴史をつむぎ、接続することにより、歴史の否定を再否定しようとしている。このような視座を持てば、三国英雄の子孫を名乗る人々が、本物か否かの議論を超えて、中国の「いま」を切り取ることができるのではないか。このように事実と現実の隙間を埋めることにより、番組づくりがスタートした。

### 3、映像化とドキュメンタリーの作成

実際にロケを行う前に、番組のコンセプトを明確にしなければならない。中国人は歴史あるいは祖先に何を求めるのであろうか、と。先行調査の際、「先祖が根だ」と、多くの中国人が言っていた。ここに、なぜ中国の人々が三国志の英雄の子孫になりたいのかのヒントが隠されている。根とは血であるのか、と問うと、もっと精神的なものであるらしい。中国の人々は先祖から現在に必要な精神的な何かを求めている。こうした中国人の歴史への意識

は日本人にとって異質なものであろう。それをどのように伝えればよいか。具体性を持たせなければ、映像で伝えることは難しい。

諸葛村の調査の際に、「誠子書」の一節が人生論として村民に受け入れられていたことを思い出した。「澹白以明志、寧静以致遠」（あっさりとして無欲でなければ志を明らかにすることはできないし、安らかで静かでないければ考えを深めることもできない）<sup>(10)</sup>。これを諸葛村の長老たちが、子孫にどのように伝えようとしているのか。それを番組の骨の部分にしようと決めた。

ドキュメンタリー番組とは、ある事実を追うのではなくて、制作者が消化した事実を撮るものである。ただ事実を羅列しても、いい番組はできない。この番組がもっとも主張すべきことは、中国の人々がいかに先祖を大事にしているかを伝えることにある。先祖に対する中国人の思いは、高齢化社会を迎える日本の視聴者に対する、一つの重要な問題提起になるかもしれない。

こうしたコンセプトに基づきロケを開始した。政府の観光局の調査団が、子孫の村・ゆかりの地などを調査していく姿を追いながら、様々な歴史への思いを切り取る。調査団には、文化史の専門家である東景南浙江大学教授が参加した。家譜の信憑性に疑問があり、三国志の子孫と断定することが学問的に難しいことを厳しく見せてくれた東教授の存在は、番組の質を高めた。蜀の諸葛子孫村、劉備（金一族）の子孫村、魏の曹操子孫村とそのルーツの安徽省雄村、呉の孫権の子孫村の本家争いなど、取材をしていくなかで大体の筋は定まっていった。むろんそれは、編集の段階で、佐野氏の豊富な経験により、構図がはっきりと作られていくのであるが。ロケの中で、もっとも秀でたキャラクターは、孫権の子孫を名乗る孫奎郎さんであった。そこで、今回の調査を通じて孫さんが成長していく以下のようなストーリーを考えた。

観光局の調査団が、各地で三国志の子孫村の認定をしていく。孫権の子孫村である龍門鎮の代表、孫奎郎さんは、観光開発による村の発展を願っているが、観光開発に必要なものが何であるかが理解できない。調査団と共に観光開発に成功している諸葛村を訪れ、自分たちの村の文化面・精神面での開発が諸葛村より遅れていることに気づく。村に戻って小学校の授業を見ると、

村の子供たちは先祖孫権のことさえも知らない。孫さんは愕然とする。先祖孫権の精神性のなかから、儉約の道徳に注目して、それを若者に教育しようとする。こうした孫さんの成長の物語に、曹操の子孫が始めて自分たちが本物の子孫であることを証明できて喜ぶ話<sup>(11)</sup>、一方で金援潮さんが劉備との係わりを否定されて悲嘆にくれる話<sup>(12)</sup>を織りまぜていく。長い番組では、いくつかの話題がなければ視聴者が飽きてしまうためである。そして、最後に先祖に熱い思いを託する孫奎郎さんの一言、「先祖の魂が存在するとは、私は信じません。私が信じることは、先祖の残した歴史を教育すれば、先祖のような立派な人物がまたできるということです」。これが、今回の三国志のテーマの答えである。

#### 4、映像化への二、三の知恵

中国ロケの難しいところは、中国人と日本人ではドキュメンタリーに対する理解が違う点にある。中国の CCTV の「記録片」などのドキュメンタリー番組では、人物のインタビューを中心に、制作者がリポーターとして直接視聴者に語りかけるという作り方が多い。大体、事前にディレクターが出演者に何かをインポートしてから、撮影を行う。大雑把に言えば、欧米のドキュメンタリー理論の影響が強い。これに対して、日本、ことに NHK の番組作りは、できるだけ自然のリアルさを求め、ありのままを撮影して、その中に意味を見出すという考え方をとる。したがって、インタビューも、ニュース取材のように座りインタビューもあるものの、基本的にはその場で素直な感想を引き出して、シーンの中で意味を完結させる。このような制作のスタンスの違いを取材対象に理解してもらうことはとても難しい。これは文化の違いであり、理屈では説明できない。

調査団の一行と同行して、子孫のゆかりの地をめぐっていく際、調査団の責任者は、調査と撮影とどっちが中心であるかと迷っていた。自然な動きを撮るために、もちろん調査が主で、撮影は調査に同行するに過ぎないと答えた。しかし、実際の撮影の際、新しい家譜が出た時には、調査団の全員が資

料に寄って、カメラの入る場所がなくなった。撮影のために人を退けて、カメラを中に入れると、「我々の調査を邪魔するな」と言われた。それを、説得しなければならない。「カメラが入らないと、撮影ができない。皆さんの折角の大発見が、カメラで撮れないともったいないではないか」。説明をしているうちに、リアルな映像は、過ぎさってしまう。出演者のプライドを考えながら、撮影を行うことには、非常な苦勞を感じた。

撮影では、カメラマンの福居正治氏の経験から、多くの満足できる内容を撮れた。彼の話では、ディレクターが場を提供して、私がおその場を撮る。人間は場があれば、自分で動く。それが自然で、リアルである。相手の話をすべて事前に知り、その通りに撮っても、いいものはできないという。簡単な例で言うと、誰でも穴に落ちたら、自力で這い上がるのが普通である。それがリアルである。それは、這い上がってくださいと言わなくてもすることで、人間の本能である。カメラは、この動きを撮ることが重要である。

ロケの時、このような場の醍醐味をなんども味わった。孫奎郎さんが諸葛村の調査に同行した時のこと。自分の先祖に誇りを持つ孫さんは、観光記念品の諸葛孔明の羽毛団扇を手にして、「そっちの先祖が羽毛団扇を手にするのは、参謀だからです。うちの先祖なら武器ですね。皇帝ですから。うちの先祖が臣下を使う立場ですから、諸葛孔明よりも格上ですよ」と自慢話をしていた。しかし実際には、諸葛村への観光客は、孫権の子孫村である龍門鎮よりもはるかに多い。観光局の陳明釗氏は、「観光客は皇帝か臣下かという地位の上下を見に来るのではない。祖先の人間性を見に来ているのです。あなたたちの村は、文化的な精神面での開発が不十分ですよ」と指摘した。その言葉は素直な人間の心理を捉えていたし、それを聞いていた孫さんも、悪意のない微笑をしながら、なんとなく文化の魅力が分ったような感じに撮れていた。面白いストーリーが、カメラマンのセンスにより、さりげなく撮れた。

また、事実を正確に語るより、いまの現実を楽しく伝えるには、ロケの力が問われる。佐野氏は「遊び心もロケの助けになる」と経験を述べた。孫権の子孫村である龍門鎮小学校での授業のシーンが、とても記憶に残った。子

供たちに孫一族の祠堂で、若い孫先生が孫権のおじいさんの言い伝え「瓜の伝説」を教えていた。中国では外国のテレビ取材は、政府の通達がないとできない決まりがあり、孫先生は番組の取材を事前に知り、子供たちに予行演習をさせていた。そこで、リハーサルの通りに撮影をしても、ありのままの事実は撮れない。そこで、龍門鎮の子供たちが、どこまで孫権のことを知っているのかを、われわれが割り込んで、演出することにした。「孫の苗字のひと、手を上げて」。80%の子供が、はいと言いながら、手をあげた。では、「孫権は、どんな人物」と聞くと、有名な政治家、政府の高官など、教科書通りに答えてくれた。ここで勝負して、さらに質問。「孫権は、どこの高官なの」。子供たちは、知らないといい、ふだん親が教えてくれていなかった事実も素直に答えてくれた。この撮影は、観光開発を進めるための先祖への尊敬が進んでいない事実を端的に示した。もと小学校の先生をしていた孫奎郎さんは、そばで見ながら苦笑いをしていた。「先祖のことをなにも知らない現実に心が痛む」と本音を言った。これは、後半、先祖孫権の儉約精神を若者に主張し続ける節目となった。

本来は、地元生まれの皇帝であり、その子孫であるのだから、親が孫権の話を実際の日常的にするはずである。諸葛村が孔明の誡子書を子孫に伝えていることに比べて、龍門鎮の教育はまだ足りない。歴史ビジネスの観光開発の根底にあるべき先祖を大事にする動きが、足りないが故に観光開発も進展していないのである。こうしたことが、制作者のナレーションではなく、シーンそのものから伝わる。これは、撮影の時に遊び心で楽しく撮影をしなければ、撮れないシーンである。

テレビ番組は、残念の芸術だと言われている。常に未知との出会いの中で撮影をするので、完璧な撮影はありえないという意味である。そのために可能な限り周到な準備を行う。今回の番組は、渡邊義浩の提案から3年ほどかかり、産学連携により学問的な裏打ちを十分に持ってロケを行った。そのためか、このように異色な三国志の番組が、NHKで何回も再放送されるなど、高い評価を得ることができた。

おわりに

大学における人文学の研究成果をテレビ番組に反映させることは、従来、あまり高く評価されることではなかった。研究上の正しさと番組上のおもしろさが両立し得ないと考えられていたからである。今回の番組制作では、3年に及ぶ産学連携の結果、正しさとおもしろさを、ある程度共存させることができた。たとえ十全な正しさが保証されない場合にも、大学は積極的に社会に研究成果を還元すべきである。マスメディアの影響力の大きさを考えれば、質の高い番組を提供することの効果が絶大なためである。これを契機に、積極的な産学連携に向けて、これからも進んでいきたい。

《注》

(1) 大学の研究教育を考える会（編）『産学連携とその将来』（丸善、1999年）、赤間亮「人文学分野における産学連携研究—立命館大学アート・リサーチセンターにおける実践例」（『大学時報』302、2003年）などを参照。

(2) 宗譜は、家譜とも呼び、一族の系譜を記した書物であり、序・家系図・人物伝などから構成される。一般に、一定の時期に改定増補版が作られ、新たに生まれた世代の系図や伝記が付加されるが、改訂の年次はさまざまな事情により異なる。多賀秋五郎『宗譜の研究』資料篇（東洋文庫、1960年）・『中国宗譜の研究』（日本学術振興会、1982年）を参照。なお、『諸葛氏宗譜』は現在、蘭溪市博物館に収蔵されている。

(3) 張許（他修）、陳鳳舉（他纂）『浙江省蘭谿縣志』（成文出版社、1983年）。

(4) 諸葛村の建造物については、陳志華・楼慶西・李秋香『諸葛村—中国郷土建築』（重慶出版社、1999年）、陳志華・楼慶西・李秋香『諸葛村』（河北教育出版社、2003年）を参照。

(5) 現在の諸葛村の様子については、包瑞田（主編）『諸葛八卦村』（上海画報出版社、1997年）を参照。

(6) 諸葛亮の「誡子書」は、『芸文類聚』巻23 鑒誡、『太平御覧』巻459 鑒戒下に、伝えられている。

(7) この言葉は、『三國志』にも『三國志平話』にも『三國志演義』にも伝わらない口

承である。元に成立した『三國志平話』では、諸葛亮は医者としても描かれており、この村の成立が元代であることと符合する。ちなみに、呉曾『能改齋漫録』には、北宋の范仲淹が、「范文正公少時、嘗詣靈祀、禱曰、他時得位相乎。不許。復禱之曰、不然願爲良医」とあるように、相になれなければ良医になりたいと祈った、という話が記載されている。

(8) ここで扱う子孫村の記述のなかには、2004年に渡邊義浩が子孫村に趣き、調査した際に判明した事実を含む。それについては、渡邊義浩・田中靖彦『三国志の舞台』（山川出版社、2004年）を参照。

(9) 『三国志』巻二文帝紀に、「黄初元年十一月癸酉、以河内之山陽邑萬戸、奉漢帝爲山陽公」とあるように、「山陽公」が正しい。

(10) 本来は、「非澹白無以明志、非寧靜無以致遠」であり、二重否定の文章なのだが、分かりやすく加工した。

(11) 曹操の子孫である証拠となった祠堂の対聯が、村の秀才で、富陽テレビ局の報道主任の曹覚民氏や、郷土史家の王運祥・蔣増福氏に理解できなかったことは、TVでは珍妙な音を入れて笑いとしたが、蔣樂群にはショックであった。文化大革命によって、伝統文化の教養が欠け、対聯に隠された意味が子孫の村でも分からなくなっていたのである。たとえ、観光ビジネスのためでも、先祖を大事にするために文化・伝統を守っていくことの重要性が、切に感じられた。

(12) 調査の時、すでに金援潮氏に家譜から劉備の子孫とは主張できないと伝えていたので、番組の取材に協力してもらえるかが心配であった。しかし、取材の際、金氏は非常に協力的で、自らの意見を雄弁に語った。このような先祖認識こそ、今回、番組化にしたかったものであり、その強い思いには共感した。渡邊義浩が追調査したところでは、生きる時に金という苗字で、死んだ後「劉」という苗字に戻るといふ風習は、明の劉謹の乱の影響に依るものと考えられる。